

小山内薫「正直もの」と鈴木三重吉「デイモンとピシ阿斯」 —『赤い鳥』の＜メロス話＞が照らし出すもの—

広島女学院大学 出雲 俊江

キーワード：赤い鳥、走れメロス、道德教育

0. はじめに

太宰治「走れメロス」¹は、やや熱すぎる友情の物語である。その熱さに照れてしまうか、しらけてしまうことも指摘されながら、この作品は長らく教科書に取り上げられてきた。平成 29（2017）年の学習指導要領改訂後の現在も、中学校国語教科書発行の 4 社すべての教科書に、中学二年生の教材として収録されている。代表的な定番教材である。

「走れメロス」が、小栗孝則訳「新編シラー詩抄」の「人質 譚詩」²を典拠とするものであることは知られており、これまでも二作の比較を元にした研究などが様々に行われてきた。また、教室実践でも比べ読みを方法とするものなどが大いに行われている。

——処刑を言い渡された男が、期限までに戻ること
を条件に、身代わりを残して去る。男は、戻れば
処刑されるとわかりながら期限までに戻る——

これと類似の構造を持つ物語は、上述のシラー「人質」以前、明治 4 年「泰西勸善訓蒙」以来、多数存在している。本稿ではこの構造の物語を総称して＜メロス話＞と呼ぶこととする³。

近年では、太宰治「走れメロス」を、明治初期以来の＜メロス話＞の軌跡上にある作品の一つとして位置づけ、その長い射程を通して、「走れメロス」という作品について考えようとする研究が進められている。それらの研究は、作品「走れメロス」とその周辺についてのよりダイナミックな見方を成果としてもたらしめている。

＜メロス話＞は大正期の児童雑誌『赤い鳥』の翻訳童話にも存在している。小山内薫「正直もの」、鈴木三重吉「デイモンとピシ阿斯」の二作である。本稿では『赤い鳥』の翻訳・再話作品であるこの二作をとりあげる。同じ構造を持つ＜メロス話＞との比較によって見えてくる雑誌『赤い鳥』の目指したものと、それによって逆照射される教材としての＜メロス話＞について考えてみたい。

1. 日本における＜メロス話＞概観

＜メロス話＞に関する資料としては、奥村淳によるものが詳細である。奥村（2017）⁴は、日本における＜メロス話＞（奥村ではくダモン話）やそれに関わる文献をくまなく抽出しリスト化している。物語だけでなく、戯曲や教員用指導書、ドイツ語教本などを含めたその数は、通し番号にして、1 から 165 までの 165 項目あり、それぞれにその特徴が記されている。ちなみに太宰治「走れメロス」（昭和 15（1940）年「新潮」5 月号掲載）は通し番号 161 である。

ここではまず、この奥村のリストにそって、日本における＜メロス話＞の軌跡を概観する。

初めて日本に紹介された＜メロス話＞は、リスト通し番号 1、明治 4（1871）年の、ボンヌ（箕作麟祥訳）「泰西勸善訓蒙 下」名古屋・名古屋学校 である。修身口授用の教科書として広く用いられた。これははじめとして＜メロス話＞は、まずは小学生向けの道德教材として、またはドイツ語学習教材としてなど、教科書や副読本などに採録されている。これに続きその後影響力のあったものとしては、明治 34（1901）年、通し番号 22、英語副読本として親しまれた Baldwin 桜井彦一郎編「Famous stories, retold by James Baldwin, adapted to Japanese students」（三省堂）に「Damon and Pythias」がある。このテキストはその後、明治 42（1909）年、通し番号 36「新訳フェイマス物語」など、お伽噺集の流行を背景に「世界の読み物」として翻訳され子どもたちにも親しまれた⁵。また教科書としては、明治 39（1906）年、通し番号 30、『中学修身訓 卷二』（三省堂）に「約束セバ必ず遂ゲヨ」⁶が採録されている。通し番号 33 明治 41（1908）年刊行の、三土忠造「西史美談」（三省堂）に「真の知己」が採録され、「真の知己」はほぼ同じ文章で明治 43（1910）年、通し番号 42、国定教科書『高等小学読本』に掲載された。太宰治も生徒としてこの教科書の「真の知己」に触れた可能性が高い。「真の知己」はその後も副読本など国語教材として広がっている。

教材としての〈メロス話〉について奥村のリストを概観すると、例えばこの『中学修身訓』から『高等小学読本』へという再録教科書の変化に表れているように、明治の後期になって、道徳から国語読本へと採録科目の移行がみられる。また大正期から昭和にかけての時期には、流行した劇化の教材として用いられたことも見える。昭和に入ってから国語読本だけでなく、再び修身の教材としても教科書や副読本に採録が見られるようになる。

奥村は、〈メロス話〉の中心的主題であるとされる「信義」について、明治時代は「〈ダモン話〉（＝〈メロス話〉稿者注）が主として個人と個人の関係のあり方を説き、人間の生きかたを教えるものとしてあったのが明治時代である。」としている。それが大正時代になると、「軍人勅諭」（明治 15（1882）年下賜）の例話とされるなど、「信義」や「信実」の対象が友人ではなくなった。約束が、「君主のためには身命を捧げるという約束」であり、「堅固な信念」となったとしている。そして昭和になると、「〈信義〉は国家と個人の関係に変質し、友達の間の友情が国家間のものになってしまった。」と述べる。

再び奥村のリストによって〈メロス話〉の流れを追えば、そういった時代の中、昭和 12（1937）年「走れメロス」の典拠として知られる通し番号 153、小栗孝則訳「新編シラー詩抄」東京改造社 改造文庫に「人質 譚詩」の発刊がある。その 3 年後、昭和 15（1940）年、通し番号 161 太宰治「走れメロス」⁷が大人を対象とした小説として発表された。

奥村は、小栗孝則訳のシラー「人質」に昭和戦前期の時代に対する批判の姿勢を見出している。またシラー「人質」を典拠とする太宰治「走れメロス」については、「国家と個人との関係を個人同士の関係に引き戻した」とし、そこから「走れメロス」は太宰治という作家の、時代に対する懸念と批判の意思を内包する作品だった」としている。

奥村の他には、佐野幹による一連の研究が質、量ともに豊富である。佐野の取り組みは、〈メロス話〉群からポイントとなる作品を一つ一つとりあげ、背景を含めた丁寧な検証を行うものであり、作品ごとに異なる観点から検証を進めた論考を次々に発表している。佐野（2021）⁸では、それらの〈メロス話〉における語られ方を重要な要素として、場面と人物描写の比較一覧表を作成し、太宰「走れメロス」

の特徴を浮き彫りにしている。

2. 教材としての〈メロス話〉

ここでは教科書教材としての〈メロス話〉をとりあげ見ていきたい。

明治 4 年の「泰西勸善訓蒙」以来、〈メロス話〉は語学学習用など日本語以外のもの、大人向けや劇化されたものなどを含め様々な形で紹介、展開されてきた。教科書での採録教科は、道徳・修身及び国語である。

〈メロス話〉は、「友情」「信義」などがその中心的主題として認識される物語である。奥村（2017）⁹も、〈メロス話〉群について、名前や役割、筋書きによる大差はなく「友達ふたりの友情が肝要」と述べる。また佐野（2021）¹⁰も、〈メロス話〉群について「信実、友愛、約束、信義といった他者との規範意識を身につけさせるという道徳上の目的を背負ってきた」と述べ、「走れメロス」についてもまた、「「信実」が物語の中心となることは異論の余地がない」とする。これら先行研究の記述を示すまでもなく、〈メロス話〉はまず「友情」「信頼」をテーマとする作品であり、これらを徳目とする道徳・修身教材として教科書に採録されたと考えられる。

国語読本への採録は、明治後半からその流れが見られることを前項で述べた。佐野（2020）¹¹によれば理由は次の 2 つである。1 つは当時の読本教材の選択が「現代文学進出期であったこと」ともう一つは、明治 44 年版「中学校教授要目」の「国語講読」に教授の要件として、「文章ハ我国体及民族ノ美風ヲ記シ国民性ヲ發揮スルニ足ルモノ、健全ナル思想ヲ述ヘ道義的觀念ヲ寛容スルニ足ルモノ…」とあるなど、態度面が重視され、人格形成に資する教材が求められていたことである。

道徳教材と文学教材の違いについては現在まで続く問題でもある。〈メロス話〉では話の特性上その混在が顕著である。

例えば大正 10（1921）年発行の教員用指導書『高等小学読本解説』¹²では、「真の知己」について、以下の様な記載があり、文学教材として読ませると同時に人間形成の意図が指導内容として盛り込まれているのが分かる。

「二、内容上 ピチウスとダモンとの二人の間の信義と愛情に感激せしめて、真の親友とはいかなるも

のであるかといふことを知らせねばならぬ。そして最後に、「若し我にもこんな親友を持つことが出来るなら、王者の富貴も栄華もいらぬ。」といった王の嘆声をほんたうに味はせてもらひたい」（下線稿者による）

幸田（2015）¹³ は、昭和 30 年代に始まる「走れメロス」の国語教科書採録においても、文学教育の役割に「人間形成」を求めるあり方が大きく働いていることを指摘する。幸田は、昭和 33（1958）年の学習指導要領国語編には「話題や題材の選定」に関する観点が見されたが、その十項目がほぼ道徳教育が目標とするものと重なっていたこと。さらに国語教育の側が、道徳教育に対抗する理念として、道徳教育をも包摂する真の「人間形成」という概念で教科内容を考えようとしていたことなどが理由にあったことを示している。

幸田は、教科書の「走れメロス」が全文掲載へ移行していったことを挙げ、それが「友情」や「信頼」といった道徳的価値に収斂される読みでなく、「人間の弱さや心の葛藤といった人間像に出会わせるところに文学的価値を見る教材観へ」の変化を見る。一方でそういった文学の価値を希求する国語科の教材観が生んだ「心情中心主義」のその中にも「隠れた道徳教育」があるという問題を併せて提示し、その未解決の上に現在の定番教材「走れメロス」があるとしている。

こうして並べてみると、明治 44（1911）年版「中学校教授要目」、大正 10（1921）年教師用指導書、昭和 33（1958）年の学習指導要領国語編「話題や題材の選定」と、時代もそれぞれの社会状況も異なっているにもかかわらず、文学教材の学習に人間形成を求める方針が、内容にそれほどの違いも無く存在してきたことが見える。

＜メロス話＞群の描く長い軌跡は、様々な時代と背景を経つつも変わらぬ道徳と国語問題の表層面を見せている。

3. 小山内薫「正直もの」

大正期の児童雑誌『赤い鳥』には＜メロス話＞が 2 篇採録されている。小山内薫「正直もの」（第 1 巻第 2 号 大正 7（1918）年 8 月）と、「デイモンとピシアス」（第五号第 5 巻 大正 9 年 11 月号）である。大正 7（1918）年 7 月、鈴木三重吉によって創刊

された『赤い鳥』は、童話、童謡、子どもの綴り方など、さまざまなジャンルを含み、後の児童文化、学校教育などに多くの影響を与えた。海外童話の翻訳・再話も多く、その数 1500 篇に迫るとされる。

（1）小山内薫「正直もの」（第 1 巻第 2 号 大正 7 年 8 月号）を読む

「正直もの」はとぼけた面白味のある作品である。あらすじは、次のようなものである。

兎が、狼につかまるが、それを聞いた婚約中のお嫁さん兎が病気になってしまったと聞く。知らせに来た兄兎に励まされ、兎は必ず帰ってくると約束してお嫁さん兎に会いに行く。身代わりに兄兎が残る。約束通り狼のところへ戻ってきた兎に免じて狼は 2 人の命を助ける。

登場人物は兎や狼に変わってはいるものの、やはり＜メロス話＞である。

しかし、細かい設定はかなり異なっていて、別の物語の様相を見せている。そのポイントと思われるものを以下に箇条書きに示した。また、後の表は「走れメロス」など他の＜メロス話＞とは異なる人物（動物？）設定や状況設定だと思われる箇所などを抽出して気づきを述べたものである。

＜特徴的な点＞

- ①兎を捕まえる狼に人間不信などの悩みは無く、権力も権威も無い。お上さんに頭が上がらない様子である。
- ②めそめそ泣く全く勇ましくない主人公兎。
- ③お嫁さんの兄兎が身代わりになるのは妹のためであって友情からではない。
- ④伯母さん達など登場人物が多く女性達も含まれる。
- ⑤皆で相談して物事を決める。
- ⑥帰った方がよいという皆の意見の理由は、約束は守るという兎の国の規則や兎の誇りのためである。
- ⑦狼のお上さんを含め、女達も意見を言う。
- ⑧お嫁さん兎との今生の別れの場面で、ひょっとすると助かるかもと言う主人公兎の覚悟の無さ。
- ⑨帰り道の障害は、洪水や戦争、コレラの流行など現代の障害である。
- ⑩狼には威圧感も陰湿さも無い。

表 「正直者」の特徴的な描写

掲載場所	本文	状況	他の<メロス話>との違いなど
p.10上	「こら、うさ公。一寸待て。」と呼び留めました。けれども兎は構はずに、猶と早く駆け出しました。そこで狼が怒って	声をかけても無視する兎。それに怒る狼	呼び止めるところにユーモアがある表現
p.10下	今日は俺もお上さんも、ご飯を食べたばかりでお腹がいっぱいだし、		狼のお上さん登場
p.10下	この兎は或兎のお嬢さんをお嫁に貰ふ筈になってゐました。		
p.10下	兎はお嬢さんの事を考へてひとりでしくしく泣いていました。	泣くうさぎ	勇ましくない主人公
p.10下	お嫁さんの兄さんが目の前に立ってゐました	お嫁さんのお兄さん登場	友人ではない
p.11下	二人で一緒に逃げようじゃないか。」 さう聞くと、兎は俄に逃げる気になりました。		逃げて生きようとする二人
p.11下	狼の夫婦は牙を鳴らしながら、二人の前へ出てきました。	夫婦で登場	
p.12上	「ふむ。それはお嫁さんが可哀さうだ。どうだね。内のお父さん。ちょいと左様ならをしに遣ってやろうか。」	お上さんのせりふ	お上さんが強い
p.12上	狼の亭主は困ったやうな顔をして「でも、もう明後日食べる筈になつてゐたのだからなあ。」	狼はお上さんに反対意見であるが弱い	
p.12下	「狼さん、あたしはきつと復歸つて参ります。あたしは自動車のやうに、急いで行つて参ります。	自動車のやうに	昔話風でない表現
p.12下	まあ。ご覧よ。可哀さうじゃないか。あんなにお嫁さんに会ひたがつてゐるのだもの	お上さんの意見	お上さんが強い
p.12下	お嫁さんの兄さんを入質に――ではない兎質に		ユーモラスな表現
p.12下	あさつての朝六時までに歸つてこないと、お前の代りに、お前の嫁の兄さん食へてしまふぞ。それから後でお前が歸つて来ると、お前も食へてしまふぞ。	物語を進める狼の役回り	
p.12下	だが、その時になれば、勘弁してやるかも知れないよ。かう言つて狼はまた笑ひました。	はっきりしていない態度	陰湿なものではない笑い
p.13上	(向かう道中の描写無し)		
p.13上	やがて叔母さんだの、従姉だの、近所の者だのが方々からお祝ひを言ひに集つて来ました。	たくさんの周りの人の喜び	周囲の人がたくさん描かれている
p.13下	帰るのは辛うございますが、一度約束をした事は守らなければなりません。それが兎の国の規則ですから。		狼のところへ帰る理由は兎の国の規則
p.13下	すると伯母さん達や従弟達も賛成しまして		みんな賛成
p.13下	さうとも、さうとも。一度約束した事は守らなければならない。昔から今までに嘘をついた兎は一足もゐなかつたのだから。		嘘をつかないことが最も重要
p.14上	けれど、狼は事に依ると、勘弁して呉れるかも知れません。	別れの深刻さ無し。甘い見通し。	きっぱりしない態度
p.14下	(帰り道の障害の描写あり) 洪水の中や、戦争の中や、コレラのはやってゐるなかを、まっしぐらに駆けました。	途中の国の様々な状況描写の後にこの記述	現代的な障害
p.15上	遅れてはならないぞ。遅れてはならないぞ。と思ひながら		兎の心中描写
p.15上	もうそれからは一足も前へ進むことが出来なくなりました。兎はもう死にさうになりました。		
p.15下	どこか遠くのお寺で六時の鐘が鳴りました。狼は穴を出て伸びをして嬉しさうに尻尾を振りました。		内面的な描写ではない
p.15下	千疋の兎が一度に叫ぶやうな声を出して、「ここにゐます。あたしはここにゐます。」とどなりました。		今までの兎に比べしっかりしている様子
p.15下	狼はその兎を大層めました。そして、兎を二人とも許してくれました。		

めめめそグズグズとした主人公兎に勇ましい覚悟は無く、お上さんに頭の上がらない狼には権力も権威も無い。男らしくない兎たちと意見を言う女達。大事なことは皆で話し合っで決めている。

気がつくのは、まず<メロス話>の中心要素であるはずの熱い友情が全く描かれていないことである。次に「正直もの」の登場人物たちが男は強くあるべしといったジェンダー規範から自由だということである。描かれているのは、弱肉強食や洪水や戦争やコレラの流行といった、弱者には受け止めるほかない厳しい現実を、話し合いながら乗り越えようとする兎達の社会である。ここで守るべきものとして示されるのは約束を守るという兎の国の規則だけである。

(2) 鈴木三重吉による代作の疑い

小山内薫「正直もの」は、鈴木三重吉の代作であった可能性がある作品である。代作の如何については横道に逸れる感もあるが、雑誌『赤い鳥』の方向性にもかかわるものでもあるので、ここで触れておくことにする。

大正7年7月5日小宮豊隆宛 鈴木三重吉の書簡¹⁴に以下のような記述がある。

「御心配の雑誌第二号、やっと今日から印刷にかゝる。一人で七編も書き、十日間毎日、午から晩迄活版屋に出張、校正、ずゐぶん弱った。(中略)少し休養したいがまた三号にかゝらねばならぬ。」

「正直もの」が掲載されたのがこの書簡に言う第二号である。「一人で七編」とある。しかし『赤い鳥』第二号に掲載された鈴木三重吉作とされている童話は2編である。童謡にかかわるところは北原白秋が中心だったと考えると、それ以外の童話作品は子どもの入選作を除くと全部で9作品である。この手紙に書かれた「七編」が本当ならこの第二号はそのほとんどを三重吉が書いたことになる。『赤い鳥』における鈴木三重吉の代作についての言及はこれまでもある。名前だけを貸すこと、つまり代作を承諾していた話なども残っているものの、結局具体的にそれと確定できるものはほとんど無い¹⁵。ここでも小山内薫の名前で書かれた「正直もの」がそれとはっきり言うことは出来ない。

『赤い鳥』には、この「正直もの」を含め小山内薫

の名前で出された童話が、絵話や海外童話の翻案童話を含めて13作存在する。うち12作が創刊号から連続して毎月掲載されたものである。その後小山内薫が童話作品を書くことは全く無く、小山内薫の童話は『赤い鳥』だけ、この時期だけである。「正直もの」はその後赤い鳥社が出した小山内薫の童話集『石の猿』（「赤い鳥の本」第6巻）に納められたが、「序」には「露西亜から輸入」とある。

「正直もの」という題こそとぼけた話といえるかもしれない。

(3) 鈴木三重吉「デイモンとピシ阿斯」

「正直もの」の約2年後、『赤い鳥』に再び<メロス話>が掲載された。鈴木三重吉「デイモンとピシ阿斯」（第五号第5巻 大正9年11月号）である。

三重吉「デイモンとピシ阿斯」は二部構成である。「一」は、王であるディオニシアスの極端な人間不信を複数のエピソードによって描くもの。「二」が<メロス話>である。

「二」のあらすじは次のようなものである。

ピシ阿斯とデイモンの二人はピサゴラス学派の学徒である。ピサゴラス学派の教えは、感情や欲望を抑えつける「自制」を人間の第一の務めだとするもので、学徒は結びつきが強い。学徒の一人ピシ阿斯がディオニシアスに睨まれて捕縛され、死刑を言い渡された。ピシ阿斯は、一旦郷里に帰って身内に会ってから戻りたいと願い出る。信じないディオニシアスに対し、ピシ阿斯は身代わりを立てるという。ディオニシアスはあざ笑うが、デイモンが身代わりとして名乗りをあげる。デイモンは、牢の中で全く不安な様子を見せず、期限になっても戻ってこないピシ阿斯を信じている。遂にピシ阿斯が戻り、王は2人をうらやましく思い、仲間になりたいと頼む。

ピサゴラス学派の話の部分は典拠であるシャーロット・ヤングの『A book of Deeds』に含まれており、三重吉の創作ではない。佐野（2018）¹⁶は典拠との比較を行い、どちらにもデイモンとピシ阿斯がピタゴラス学派の徒という設定と「ピタゴラス学派」の教義の説明があることを示している。三重吉版ではキリスト教についての部分が省略され、ピサゴラス学派の話題が二の始まり部分に移されている。佐野

は併せて三重吉版ではディオニシアスの形象が豊かなものになっていることについても触れている。

本文を読んでみよう。「二」の始まりは、このとおりである。

「併しディオニシアスについて伝えられてゐるお話のなかで、一番人を感動させるのは、怖らくニ(ママ)シアスとデイモンとのお話でせう。

この二人はどちらもピサゴラスの学徒と言って、ピサゴラスといふ、ずっと昔にゐた学者の教へを信じてゐる人たちでした。」

ピシアスとデイモンの二人が人を感動させる行動ができたことを述べた後に続けて、彼らがピサゴラスの学徒であったことを示す紹介の形で始まる構成である。物語ではこの後に続けて「自制」こそ人間の第一の務めだとするピサゴラス学派の教義の説明があり、その説明の最後には下の引用の様に彼らの結びつきの強さが述べられている。

「それらの学徒は、お互いに、いつも固く結び合つて、いろいろの学問を修めていました。特に数学と音楽とを一番大切にしていました。」

「ピシアスは、併しそれには、私がかへるまで、身代りになつてくれるものがあるのです。私の友だちの一人がちゃんと引き受けてくれるのですが。」(下線は稿者)

注目されるのは、デイモンが名乗り出たのは、ピシアスとの個人的な交友が理由ではなく、学問による固い結びつきが理由だと思われる点である。上の引用部分では、ピシアスは身代わりとなるデイモンの名を挙げてはおらず、「友だちの一人」としている。ピシアスは、身代わりをデイモンに直接依頼したのではなく、仲間の誰かが身代わりになってくれると信じての発言であつたと思われる。

落ち着いた様子でピシアスを待つデイモンの内心については、ピシアスへの不審が全く無かつたのか、または自制によって表に出さずにいられたのかは分からない。物語全体を通じて感じられるのは、学問への熱い思いであり、熱い友情ではない。

4. <メロス話>の軌跡の中の「友情」

『赤い鳥』の2作では、登場人物達が身代わりに

なる理由が「友情」ではなく、具体的に他のものとされている。

「正直もの」の兄兎が身代わりとなつたのは病気になつた妹兎への思いである。「デイモンとピシアス」でデイモンが身代わりとなる動機は共有する学問への信念であり、その共有による信頼である。

比較のため、他の<メロス話>では身代わりになる理由がどのように説明されているのか確認する。

国定教科書『高等小学読本 巻一』(明治43(1910)年)掲載の「真の知己」ではどうか。先述のとおり教科書教材として広く読まれ、太宰治も学んだと考えられる代表的<メロス話>の一つである。「真の知己」でダモンがピチアスの身代わりを引き受けるくだりはこうである。

「ピチアスの無二の親友に、ダモンといふ若者があつた。王に向つて、「私はピチアスの親友でございます。彼は決して二言致すやうな者ではございません。・・・」」(下線稿者)

身代わりを引き受けたダモンにとっての理由は「私はピチアスの親友」だからであり、それ以上の記載は無い。信用といった記述は無く、身代わりになる直接の理由は「親友」だからであり、ピチアスへの強い信頼については描かれない。(信頼が無かつたわけではないだろう)。

では太宰治「走れメロス」の場合はどうだろう。メロスは本人に断りも無くセレヌンティウスを人質に指定する。そんな暴挙が許され、セレヌンティウスも人質を引き受けるのも「無二の親友」だからである。

「この町にセレヌンティウスという石工がいます。私の無二の親友だ。あれを人質としてここに置いていこう。」

「竹馬の友、セリヌンティウスは、深夜、王に召された。暴君ディオニスの面前でよき友とよき友は、二年ぶりで相会うた。メロスは友に一切の事情を語つた。セリヌンティウスは無言でうなずき、メロスをひしと抱きしめた。友と友の間は、それでよかった。」(下線はいずれも稿者)

互いを思い命をかけるほどの友となるまでには濃厚な人間ドラマがあるはずだし、それは物語上重要

な点であるはずだ。が、ここでもそこは省略されている。全て確認したわけではないが、多くの〈メロス話〉には、身代わり行動の具体的理由も、友となるに至った経緯は描かれないのである。

奥村（2017）は、明治期には、「信義」や「信実」が主として個人と個人の関係のあり方としてあった。大正時代になると「信義」や「信実」の対象が友人ではなく「君主のためには身命を捧げるという約束」であり、「堅固な信念」となる。昭和になると、「〈信義〉は国家と個人の変質し、友達の間の友情が国家間のものになってしまった」という概観を示していた。国家との友情とはおかしい話だが、理由も経緯も不要なら、相手が人である必要が無い。人を離れても成立するものとして友情が存在しているのである。

5. 『赤い鳥』の〈メロス話〉が照らし出すもの

鈴木三重吉は『赤い鳥』創刊以前から「世界童話集」を発刊するなど日本の童話の「改良」を謳い、『赤い鳥』創刊にあたっては、当時の『少年倶楽部』『少女世界』といった児童雑誌とは全く異なるものを目指していた。下の引用は、『赤い鳥』の創刊号から毎号巻頭に掲げられた「『赤い鳥』の標榜語(モットー)」の一部である。

「○『赤い鳥』は世俗的な下卑た読みものを排除して、子供の純正を保全開発するために、現代第一流の芸術家の真摯なる努力を集め、兼て、子供のための若き作家の出現を迎ふる、一代区劃的運動の先駆である。」

では三重吉が目指した子どものための読みものはどのようなものだったのか。

ここまで確認してきたようにそれまでの他の〈メロス話〉の要点は「友情」であった。しかし『赤い鳥』採録の2篇の〈メロス話〉「正直もの」と「デイモンとピシアス」は、同じ物語構造でありながら「友情」が描かれていない。そこには、「友情」や「信義」を美しいものとする物語世界の創造を目指すのではなく、それとは反対の方向性が見て取れる。もちろんそれを雑誌『赤い鳥』童話全体の方向性とするのは困難であるが、少なくとも〈メロス話〉と同型の作品であるこれら2作品において、その反対方向の物語作りが行われていることは、特筆すべ

きことであると考ええる。

〈メロス話〉の「友情」についてももう少し考えてみたい。

〈メロス話〉は道德教育教材としても大いに広がった。そこで〈は「友情」「信義」が物語の要であり、それは道德教育場面での重要な徳目であった。しかし、現実の私たちは「正直もの」の兎たちと同じく、弱肉強食や洪水や戦争やコレラの流行といった、弱者には受け止めるほかない厳しい現実のなかで、相手を思いやるが故の「津波てんでんこ」を生きている。そう考えると、個別の具体的な関係や成立状況がなくアプリアリに存在する〈メロス話〉の「友情」、言い換えればこの教材による道德教育上の「友情」は、理由無く他者に犠牲を強いる概念でしかない。『赤い鳥』の2作はそのことを照らし出していると言える。

また、ちょっととぼけた味の「正直もの」は、他の〈メロス話〉が高らかに掲げる「友情」が、男性に求められたジェンダー規範の一つとしてあることも気づかせる。そうであるなら、その「友情」を、学ばべき徳目として掲げる道德教育は、ジェンダー規範の刷り込み教育でもあったと言えることになる。そして、文学教育の中に時代を超え「人間形成」という言葉で執拗に紛れ込むものもまたそれであったことが知られる。

溝渕（2019）¹⁷は、単なる翻訳を超えて展開された『赤い鳥』翻訳童話を概観し、そこには「従来の「お伽噺」の世界を脱した、多様な読みものによってつくられた外国児童文学の世界が形成されていた」としている。鈴木三重吉は『赤い鳥』綴り方の選評を通じて、子どもたちに、自分の目で見たものを自分の言葉で書くことを強く求め続けた。そのことを思うとき、ただの翻訳を超える『赤い鳥』の翻訳再話もまた、人間の多様なありさまから離れないことを方法として、従来の「お伽噺」が植え付けようとするジェンダー規範その他様々な概念からの自由を目指したものではなかったかと考える。

【注】

1. 太宰治「走れメロス」（初出 「新潮」5月号 昭和15年5月）
2. 昭和12年 小栗孝則訳「新編シラー詩抄」東京
3. 改造社 改造文庫に「人質 譚詩」が収録
奥村淳（2017 下記注4）では、この構造の物語をく

ダモン話」と読んでいます。奥村が述べるとおり、この物語類型の歴史に於いてはメロスよりダモンの方が呼び名として一般的であり、＜ダモン話＞とするのが適当であると考えますが、現在の私たちにとってはすでに「走れメロス」の印象が強くあり、＜メロス話＞の方が伝わりやすいと考え、本稿ではそう呼ぶこととした。

4. 奥村淳「太宰治「走れメロス」について ―日本における＜ダモン話＞の軌跡―」山形大学紀要. 人文科学 = BULLETIN OF YAMAGATA UNIVERSITY. HUMANITIES 18 (4), 39-72, 2017

5. 佐野幹「明治後期から大正初期にかけての『フェイマスストーリーズ』の受容」（横浜国大言語教育研究 42 pp.10-20, 2017）による

6. 道徳教材としての展開については、佐野幹「坪内雄蔵『中学修身訓』における「約束セバ必ず遂ゲヨ」の生成と展開」横浜国立大学言語教育研究 No.45 2020 pp.16-34 に詳しい。

7. 注1に同じ

8. 佐野幹「「メロス伝説」の中の「走れメロス」読書科学 62 (3-4), pp.132-145, 2021

9. 注4に同じ

10. 注8に同じ

11. 道徳教材としての展開については、佐野幹「坪内雄蔵『中学修身訓』における「約束せば必ず遂げよ」の生成と展開」横浜国大言語教育研究 45 pp.16-34, 2020 横浜国立大学言語教育研究会に詳しい。

12. 中野傳治・大杉謹一共著『高等小学読本解説』大正10年10月、明治図書

13. 幸田国広「走れメロス」教材史における定番化初期の検討：道徳教育と読解指導に着目して」読書科学 56 (2), pp.65-75, 2015

14. 鈴木三重吉全集 第六巻』p.351、1982、岩波書店

15. 赤い鳥』における鈴木三重吉の代作については下岸大助による以下の研究が詳細である。下岸大助「『赤い鳥』と代作問題：徳田秋聲「唐傘」・芥川龍之介「犬と笛」ほか」国語と国文学 明治書院/ 東京大学国語国文学会 編 96 (10), pp.51-66, 2019-10

16. 佐野幹「教材「走れメロス」の生成過程」読書科学 60 (2), pp.115-127, 2018 日本読書学会

17. 溝渕園子「翻訳文学史から見る『赤い鳥』と海外作品の〈再話〉」フランス文学 32 pp.52-64, 2019